



## 研究ノート

### 近世六十六部廻国聖の聖地選択をマッピングする

千葉経済大学経済学部

菅根 幸裕

#### 1. はじめに

六十六部廻国聖とは、一般に六部（以下六部と略）と略称され、人々の喜捨を受けながら日本の六十六カ国を廻り、それぞれの有力社寺に法華経を奉納する民間宗教者であった。こうした六部は、中世以来かなり多く存在したことが金石文等でわかっているが、その廻国の実態は、不可解な部分が多かった。それというのも、明治維新期に、六部は修験とともに活動を禁止され、以後行われなくなったためである。本研究では、近世における六部がどのようなネットワークを持ち、どのようにして納経する聖地を選択したか等、六部の実態について、納経帳の分析により解明したいと考えている。

六部に関する総合的研究を行っている同じ京都大学地域研究統合情報センターの共同研究員である小嶋博巳さんにより、不可解であった六部についてその実態が、以下のように明らかになっている。

- (1) 六部は源頼朝を起源とする縁起を携えていたこと。
- (2) 六部は、西国順礼や四国遍路等と重複する場合が多く「信仰の入会地」的性格を持っていたこと。
- (3) 東国出身者が多く、近世では寛永寺に「東叡山御条目」を求めるなど、権威づけを求める傾向があった
- (4) 近世の六部の廻国の記録をみると、一宮あるいは国分寺が重視されるという一定の傾

向があるものの、実際にはかなり自由に訪れるべき聖地が選択されてきた<sup>1)</sup>。

さて、小嶋さんは、六十六部に関するまとまった史料として、第1に中世後期に属する経塚とそこからの出土品である経筒、第2に近世の廻国供養塔、第3に納経帳の3点をあげている。集積された六部側の史料という視点からは、この指摘は的確と考える。筆者の試みとして、まずは六部の納経帳を紹介し、併せて六部を受容した側の史料を分析することにより、こうした廻国を可能とさせた要素の考察も試みてみたい。

## 2. 六十六部廻国データ作成の問題点

千葉県館山市立博物館には、安房国山本村（館山市）の権右衛門という六部が、安永4年（1775）3月1日から同7年10月18日まで約三年半かけて全国を行脚した三分冊の納経帳が所蔵されている。この廻国ルートをとるため、廻国先の位置情報を確定するため現在地を含めた表を作成した。その際の問題点を報告したい。また、権右衛門と比較するため、68年前の宝永4年（1707）に廻国した下総国香取郡松子（成田市松子）の宗心のデータを分析する。

### 2.1. 権右衛門廻国について

(1) 権右衛門の廻国のルートは以下のようになっている。

→寛永寺→板東・秩父観音巡礼として巡錫→信濃・北陸・山陰（隠岐国は出雲国で代判）  
→九州（阿蘇で越年、日向国を1ヶ月かけて廻る）→四国遍路として巡錫→西国観音巡礼として巡錫→飛騨国・甲斐国を迂回して安房国へ帰郷→東北方面へ→帰郷（548カ所1383日）（→安永8年5月晦日出立→武蔵国一宮氷川神社→浅間山→帰郷）

以上から、廻国中ベースキャンプとする村を決め巡錫の許可を得て放射状に活動したかとも考えられる。

(2) 納経の間に29日間、60日間という空白がある。この日数は何を示しているのか不明である。新しい国に入ると、まず聖地として一宮・国分寺もしくは八幡のいずれかを目指すことを原則としたためか。トラッキング上大きな支障となっている。

(3) 権右衛門の納経帳を分析すると、納札すべき聖地として、一宮・国分寺・そして八幡神社が選択されていることがわかる。八幡神社を選択した理由としては「六部縁起」の頼朝坊伝説に基づくものか、また、他の納経帳でも同様であるかどうか、なぜ一宮・国分寺が選択されたか、理由が明確ではない。国分寺・一宮・八幡全てに納経した国→36カ国(54.5%)、一宮に納経→59カ国(87.4%)、国分寺に納経→56カ国(81.1%)、八幡に納経→52カ国(78.1%)。

(4) 権右衛門は、四国では四国遍路・関西では西国順礼・関東では板東順礼・秩父では秩父順礼として廻っている。しかも四国遍路88カ所中84カ所(97.7%) 西国順礼33カ所中29カ所(87.8%) 板東順礼33カ所中31カ所(93.9%) 秩父順礼34カ所中30カ所(91.9%) というようにいずれも一宮・国分寺・八幡より納経率が高い。

(5) 権右衛門の出身地安房国山本村は曹洞宗である。権右衛門はそのためか曹洞宗の名刹を巡拝している。

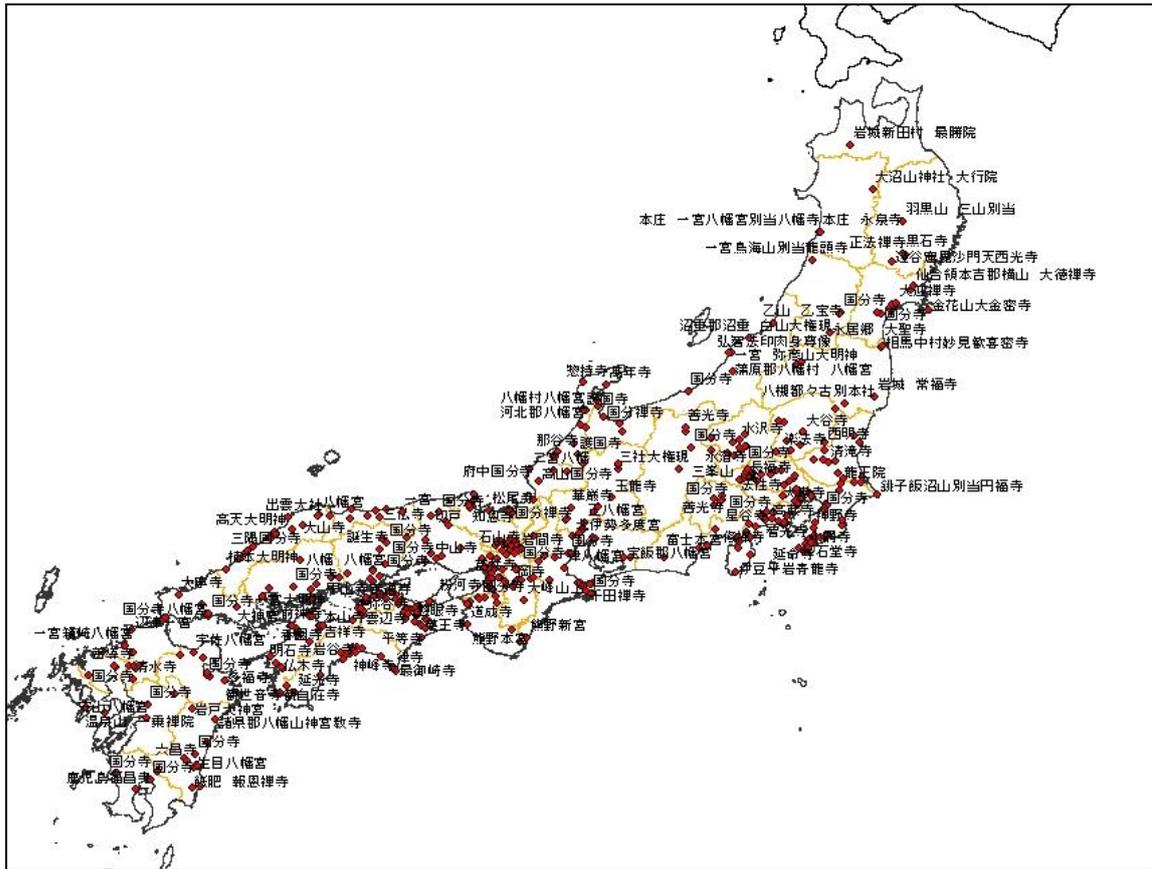


図 権右衛門の廻国マッピング (大阪国際大学 桶谷猪久夫氏作成)

## 2.2. 宗心の廻国について

千葉県成田市松子宮野長太郎氏所蔵されている宗心の廻国帳を分析してみた。廻国は宝永4年(1707)1月17日から翌年10月11日までで、77カ所に納経している。その特徴をあげると

- (1) 66ヶ国中和泉国・若狭国・三河国を抜かず63ヶ国に廻国しているが、必ず各国の一宮・国分寺・八幡に納経されているわけではない。
- (2) 宗心が納経して権右衛門が納経しなかった寺社は23ヶ所であるが、納経先すなわち聖地選択に共通性はない。
- (3) 納経場所の空白が30日、44日、80日の3回ある。この間の行動は不明である。
- (4) 納経月日の錯簡が2カ所ある。

## 2.3. マッピングにあたって

以上、2つのデータ合わせ、同じく研究員の小嶋博巳さんが提供した越後国の金益、陸奥国の善統不軽という2名の六十六部のデータについて大阪国際大学の桶谷猪久夫さんにマッピングしていただいた。すなわち、まず納経所の現住所を調べ、データに付加していくもの

であるが、以下の障害にあたることになった。

(1) まず納経先に多い「○○郡正八幡宮」という表記。対象地域に八幡神社は複数あり、その中のいったいどの八幡神社を実際に参拝したのかが問題である。

(2) 神社に納経する場合、その別当寺に納経するが多いが、これらの別当寺は、明治維新期の廃仏毀釈で廃寺になっているものがほとんどである。よって、現存する神社に直接納経したことにしないとマッピングができない。

桶谷さんは、ご自身で膨大な地図・地名データ・ベース（地名辞書）を持っているので、これでまず位置情報を特定してもらい、Google Map に位置情報を設定してもらった。ここから先のマッピングは、素人の私にはお手上げなのであるが、桶谷さんは ArcGIS から JPEG ファイルへ変換し、最後に GeoTIFF ファイルにより、地図上でのトラッキングを可能にもらった。つまり、六部一人一人の動きをディスプレイ上で追えるようにまでなったのである。ただし、このトラッキングでも、前述したとおり、空白の日数が問題で、そこでしばらく動きが止まってしまうのである。

### 3. 廻国先の増加について

私と小嶋さんがデータを持ち寄った際、一つ疑問に思った点がある。すなわち、私が持参した六部のデータ2名のうち権右衛門は安永4年(1775)3月1日から安永8年(1779)10月まで548カ所に納経している。宗心は宝永4年(1707)1月17日から翌年10月11日までで、77カ所である。小嶋さんが提供した越後国の金益は、天保5年(1834)6月から嘉永元年(1848)6月まで557カ所に納経している。もう一人の陸奥国の善統不軽は、宝永3年(1706)2月から同4年7月までで78カ所に納経している。なぜ宝永年間に廻国した宗心と不軽の2名はそれぞれ77カ所、78カ所と少なく、江戸後期の権右衛門や金益はそれぞれ548カ所、557カ所と8倍近くに増加しているのであろうか？まず、考えられるのは、権右衛門と金益は、四国八十八カ所遍路・西国三十三カ所順礼・板東三十三カ所順礼・秩父三十四カ所順礼をオプションとして廻っているのに対し、宗心と不軽は廻っていない。逆に、宗心と不軽は、だいたい各国一カ所を廻っているのに対し、権右衛門と金益は有名寺社にも足を伸ばしている。すなわち、元来六十六部廻国巡礼というのは、宗心や不軽の形態で、時代が下がるにつれ、四国遍路など様々な要素が付加されていったと考えられないであろうか。すなわち、18世紀前半から全国的に遍路や順礼が盛んになり、それらを六十六部廻国に付加したのが権右衛門や金益であったと考えるのである。

### 4. 六十六部廻国縁起と聖地選択

それでは、近世六部の原型ともいえる宗心と不軽はどのようにして納経先を選択したのであろうか。ここで問題となるのが「日本廻国六十六部廻国縁起」(以下、廻国縁起と略)という史料である。すなわち、六部が道中携えたものだが、この「廻国縁起」については小嶋博巳さんがすでに書誌学的に詳しく分析している<sup>2)</sup>。それによると、成立年次の明らかな最古

のものは享禄4年(1531)の高野山無量壽院甲本であるが、近世にはいると刊本となり広く流布した。小嶋さんによると、この刊本もいくつかの系統に分類されるが、後半に納経所一覧をとともなうものが多い。すなわち「六部はこの国ではこの寺社に納経せよ」とした一覧が付けられているのである。そこで、この納経所一覧と宗心・不軽が廻った場所とはどのくらい一致するのであろうかを試してみた。使用するのは東京都北区の真言宗寿徳寺に伝来する版本<sup>3)</sup>で、「宝永五年戊子七月二日 天下太平国土安穩 武州江戸大伝馬町三町日本問屋小林喜右衛門近房」の刊記がある。宝永5年(1708)版を題材としたのは、刊行されたのが宗心・不軽の廻国時期に近いためである。

まず宗心であるが、廻国した63カ国のうち約93%にあたる59カ国が「廻国縁起」に掲載された寺社である。次に不軽は、66ヶ国中、大和国・伊勢国・志摩国・信濃国の5ヶ国を抜かず62ヶ国で納経しているが、そのうち91%の57ヶ国が「廻国縁起」に掲載された寺社である。以上から、この両者は、納経先を選択するのに、多く「廻国縁起」に準拠していたものと判断できる。「廻国縁起」に指示された寺社は各国の有名寺社ではない場合も少なくないが、両者とも近在の有名寺社には納経せず、多くは「廻国縁起」の指示通りに納経したことになる。ただし、例えば尾張国の場合「廻国縁起」では一宮真清田神社への参詣を指示しているが、両者とも熱田神宮に納経しており、越前国では白山平泉寺のかわりに曹洞宗総本山の永平寺に、出羽国では「廻国縁起」では立石寺を指示しているのに出羽羽黒山へ納経している。「廻国縁起」とは違うことは承知の上でやむにやまれずこの三カ国では有名寺社に納経してしまったのであろうか。「廻国縁起」の指示よりも有名寺社への参詣に意識が動いた事例であるが、こうした有名寺社や札所・霊場への参詣意欲が、時代が下がるにつれ納経先の増加にむすびついていくのであろう。

## 5. おわりに

以上、六部の聖地選択について、今まで考慮していなかった「廻国縁起」をもとに分析してみた。その結果、江戸前期には聖地選択を「廻国縁起」に準拠して廻国していた六部は、時代が下がるにつれ、四国遍路・西国札所・板東札所・秩父札所を付加し、さらに各国の一宮・国分寺・八幡を必ず廻るようになったものと考えられる。それではなぜ、一宮・国分寺・八幡を廻るようになったのかはわかっていない。現在のところ、権右衛門・金益・宗心・善統不軽の4名の六部のマッピングが出来上がっている。納経帳はまだ全国に何冊か存在し、これらをデータ化しマッピングすることで、六部に聖地選択にどのような共通性があるのかどうかを分析していきたい。また、こうした六部の廻国活動を可能にした本末構造やネットワークについても明らかにしていきたいと考えている。

## 註

- 1) 小嶋博巳「六十六部に関する二、三の覚書」（『生活文化研究所年報』1 ノートルダム清心女子大学 昭和 62 年）、同「六十六部縁起と頼朝坊伝説」（『生活文化研究所年報』2 ノートルダム清心女子大学 昭和 63 年）、同「頼朝坊の笈とその掟書」（『生活文化研究所年報』4 ノートルダム清心女子大学 平成 2 年）、同「廻国行者と天蓋六部」～『日本九峰修行日記』の提言する二、三の問題について」（『宗教民俗研究』3 平成 5 年）、同「廻国供養塔にともなう埋経・納物について」（『生活文化研究所年報』12 ノートルダム清心女子大学 平成 10 年）
- 2) 小嶋博巳「六十六部縁起の諸本について」（『生活文化研究所年報』15 ノートルダム清心女子大学 平成 14 年）、同「六十六部縁起の諸本について（2）」（『生活文化研究所年報』16 ノートルダム清心女子大学 平成 15 年）
- 3) 小嶋さんの分類によるといわゆる「宝永五年本」で大谷大学図書館、京都大学附属図書館 他 4 カ所に同じ刊本が伝来する。

\* \* \* \* \*

# 上座仏教の断絶と復興をめぐる時空間マッピングの課題

## —中国雲南省・西双版纳の寺院と止住者のデータ分析を中心に—

文教大学文学部

長谷川 清

### 1. はじめに

中国雲南省に位置する西双版纳タイ（傣）族自治州（Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture、以下では西双版纳と略記）は上座仏教徒が多く居住する地域として知られる。同地のタイ族はタイ・ルー（Tai Lue）を自称する。筆者は2009年及び2010年の8月～9月に、同自治州の景洪市において村落寺院の現状と出家者の移動に関する実地調査の機会を得た。西双版纳には大小30余りの山間盆地が分布し、水稻栽培を主としたタイ族の伝統的な居住域として一定数の人口が集中してきた。こうした盆地はムン（Meng、勐）と呼ばれ、地域社会を形作る地理的基盤となっている。ツェンフン（景洪、Jinghong）、ムンロン（Menglong、勐龍）、ムンナム（Mengnan、勐南）、ムンハイ（Menghai、勐海）、ムンツェ（Mengze、勐遮）、ムンラー（Mengla、勐腊）などはタイ・ルー村落が多く分布するムンである。

調査地としたのはツェンフン盆地の嘎洒鎮（Gasa Zhen）である。ツェンフン盆地は平均海拔高度553m、総面積約76万km<sup>2</sup>で、西双版纳で4番目の規模を有する。2007年の統計によれば、嘎洒鎮には141村落（村民小組、自然村）が分布している。この村落数にはタイ族以外にハニ族やクム人、ラフ族、漢族などの村落も含まれている。未調査の村落が多くあるため、ツェンフン盆地（周縁の山地・丘陵部も含む）に分布する上座仏教の寺院については正確な総数を把握していない。実地調査では嘎洒鎮に属する67村落を対象とした。

収集した資料の整理と分析は目下継続中だが、ここではその作業過程の一部を報告し、上座仏教圏における出家者の地域内／地域間移動、寺院止住の様態、ネットワークなどについて地域間比較を今後進めていく際の視点とデータ分析の結果を呈示したい。なお、ここでは「西双版纳タイ族自治州」を特定の歴史的属性を帯びている地域空間と捉えておく。それは歴史上、同地域にはシプソンパンナー（Sipsong Panna）と呼ばれる王国が形成され、中華人民共和国の成立（1949年）以後、タイ族を主体とする民族自治州へと移行し、その過程でローカルな行政単位としての機能を付与され、今日に至っているからである。

西双版纳は東南アジア大陸部の北部地域と連続し、瀾滄江（Langcangjiang、メコン川上流部）が中央部を流れているが、ラオス及びミャンマー・シャン州と接している。1990年代以降、東南アジア大陸部との交通ネットワークの中核として嘎洒鎮が位置するツェンフン盆地ではインフラ整備が進行し、大規模な都市化が起きている。この点はタイ族村落における伝統的な宗教実践のあり方を大きく変容させている。今回収集した実地調査のデータにもそうした地域社会の変化の影響が色濃く反映されている。

## 2. 西双版納からの視点

### 2.1. 雲南省の宗教的多様性

中国では、仏教（蔵伝：チベット仏教、南伝：上座仏教、漢伝：大乘仏教）、伊斯蘭教（イスラーム）、基督教（プロテスタント）、天主教（カトリック）、道教を「宗教」(Zongjiao)として公認している。このうち上座仏教は雲南省の西・南部地域に居住するタイ（傣 Dai）、プーラン（布朗 Bulang）、アチャン（阿昌 Achang）、ドアン（徳昂 De'ang）などの少数民族が信仰している。中国とミャンマー、ラオスとの国境地域であり、上座仏教圏の周縁部となっている。

表1 雲南省の宗教教職人員(2002年度)

単位：人

地区	チベッ ト仏教	上座仏 教	大乘仏 教	イスラ ーム	プロテ スタン ト	カトリ ック	道教
迪慶	2340	0	0	4	510	51	0
怒江	6	0	0	0	1714	38	0
麗江	389	0	5	15	103	0	0
大理	0	0	401	330	76	5	134
保山	0	14	365	100	112	0	140
徳宏	0	148	48	1	315	17	1
臨滄	0	300	33	33	77	0	32
思茅	0	227	1	48	483	0	0
西双版納	0	905	0	19	45	0	0
昆明	1	0	97	230	497	5	15
昭通	0	0	37	1038	42	7	26
曲靖	0	0	71	403	42	5	2
楚雄	0	0	134	269	312	0	0
玉溪	0	0	44	650	14	0	0
紅河	0	3	106	246	39	9	0
文山	0	0	2	112	0	1	0
合計	2736	1597	1344	3498	4381	138	350

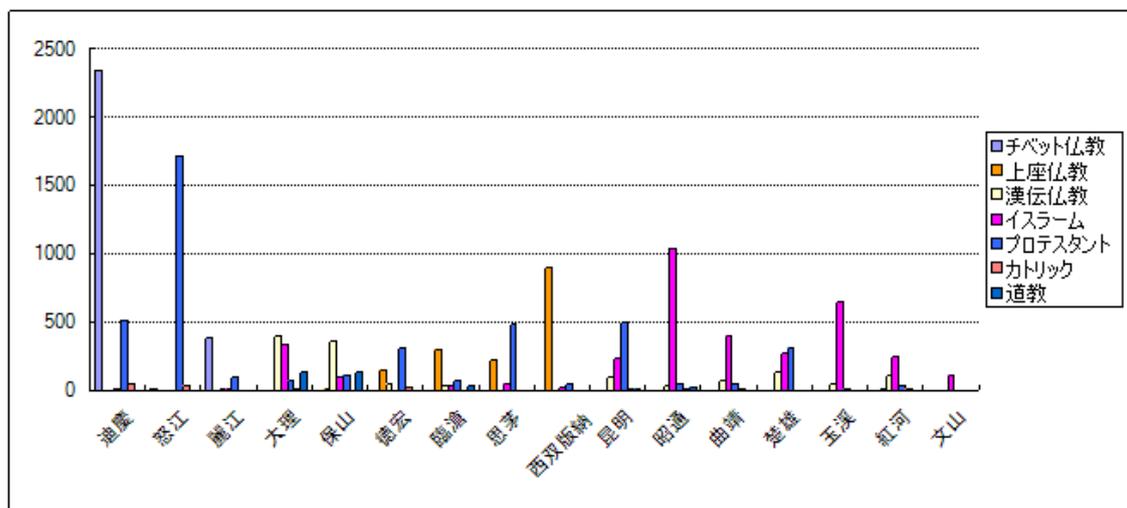
(出所) [熊勝祥・楊学政編 2004 : 6-7] に基づき、筆者作成

2002年度の統計(表1)によると、雲南省に居住する上座仏教徒数は約89万人で、その内訳は西双版納タイ族自治州29万人、徳宏タイ族ジンポー族自治州32万人、思茅地区11万人、臨滄地区13万人である。中国という全体社会のなかでみれば、上座仏教はチベット仏教などと同様、いくつかのエスニック集団が信仰する「宗教」であり、この点が東南アジア大陸部の仏教国家とは事情を異にするところである。表1には雲南省に分布する諸宗教の聖

職者（「宗教教職人員」と呼ばれる）の総数が示されているが、上座仏教では僧侶（比丘）は宗教教職人員に含まれる。西双版纳が最も多い点を確認しておきたい（図1参照）。

図1 雲南省の宗教状況

単位：人



(出所) [熊勝祥・楊学政編 2004 : 6-7] に基づき、筆者作成。

## 2.2. 上座仏教と村落寺院

西双版纳の上座仏教は伝播の時期や経路に関していまだ不明な点が多く、研究者によって意見が分かれている。スリランカ大寺派系 (Mahavihara) の上座仏教がタイ北部からシャン州南部を経て 14 世紀から 15 世紀にかけての時期に伝播し、受容されたとする見解が有力である。事実、タイ北部 (Tai Yuan) やケントウン (Tai Khun) などのそれと共通点が多いように思われる。同一のタム (Tham、経典) 文字を使用するなどの面でヨン派 (Yuan Sect) の系統を引くとされ、ミャンマーのシャン仏教からの影響が顕著な徳宏地区の上座仏教とは多くの点で違いがある [長谷川 2011]。

タイ・ルーの村落は「1村1寺」タイプが一般的である。これまで見て回った範囲では、1つの村落 (自然村) に1つの寺院 (Vāt) が建立されている場合がほとんどであった。本堂 (Vihan)、鼓房 (Hon kəŋ)、僧房 (Hon)、精霊祠 (Hə teuvada)、寺院の守護霊の祠 (Teuvada vāt) などが基本的な施設である。布薩堂 (Ubosot) を有する寺院とそうでない寺院に分かれ、後者が圧倒的に多い。中心寺院 (Vāt kau) は一般の村落寺院よりも高いランクにあり、村落寺院のつながりの拠点となっている。寺院に止住する出家者は、一般に住職 (Tulong、中国語では大仏爺)、補佐役の僧侶 (Tunoi、二仏爺)、見習僧 (Pha、大・小和尚) などである。

西双版纳のタイ・ルーに関する調査研究は中華民国期に始まった。しかし、宗教信仰についての記述はきわめて表面的であり、当時の寺院状況を示す内容はほとんど含まれていない。中華人民共和国が成立し、「社会歴史調査」と呼ばれる大規模な調査研究が 1950 年代後半から 60 年代にかけて実施された。この調査プロジェクトの主たる目的は農民村落の社会経済状況の現状理解にあり、農民が保有する水田や土地所有、農具、家畜 (水牛) などの数量把握を通じて農民層の階級成分を明らかにし、上からの社会主義改造を断行することにあつた。

したがって生産関係以外の領域、特に宗教信仰に関しては、今日から見ればきわめて不十分な調査内容となっている。とはいえ、寺院施設、出家者・サンガの組織形態、政治社会組織との関係、仏教儀礼や積徳行為、見習僧の出家慣行などについて明らかにされたことの意義は大きく、当時の仏教信仰の実態を知る上で貴重な情報源となっている。

1980年代になると、マルクス主義理論による限界を抱えつつも、少数民族の宗教信仰を対象とした民族学・人類学的研究が行われるようになった。また1950年代後半から1960年代前半の「社会歴史調査」の調査資料の刊行が始まり、こうしたなかには上述の上座仏教に関する資料がいくつか含まれている。調査研究の新たな取り組みとしては、社会変動と世俗化との関係、見習僧の出家慣行と学校教育との軋轢などが問題となり、研究者の関心が集まった。しかし、それらはマクロな視点からの分析にとどまる傾向があり、村落レベルの実践宗教を主題とした調査研究の成果はきわめて少ない。その後、欧米流の社会・文化人類学の方法論をふまえてミクロな分析をめざした調査研究が出てきたが、旧来の欠点を完全に乗り越えるまでには至っていない。社会主義体制下における社会変動、1980年代以降の現代化とのかかわりで、宗教実践のマクロな動態を明らかにすることが主たる関心事になっている<sup>1)</sup>。

このように、マクロ分析に重点とした中国人研究者による上座仏教社会研究の分析視角や成果を今後どのように時空間マッピングの地域間比較に活用していけばよいだろうか。社会主義体制下での断絶を経験した上座仏教徒社会の動態という問題領域の設定は、上座仏教圏を対象とした地域空間の宗教実践と社会・文化動態研究にとって有意義であり、カンボジアやラオスとの地域間比較を進めていく場合の具体的な項目になりうるはずである。しかしそのためには、社会主義体制移行後の西双版纳における村落レベルの宗教実践の動態に対して、ミクロとマクロを連関させる視点からデータ分析を行い、比較の枠組みを作っておくことが必要かと思われる。

### 3. 西双版纳における村落寺院と出家者の動態

中国では大躍進政策（1958～60年）及び文化大革命の時期（1966～76年）に宗教活動は禁止され、西双版纳の上座仏教社会にも深刻な被害をもたらした。今日、西双版纳で見ることが出来る寺院施設や仏教徒としての宗教実践は、この断絶の時期を経て復興、再生したそれである。文化大革命の時期（1966～76年）には一切の宗教活動が「封建迷信」として批判の標的になった。寺院は閉鎖され、人びとの宗教実践は断絶の危機を経験した。しかし文化大革命の終了後、宗教信仰に対する緩和が進み、壊滅状態にあった寺院や仏塔が村人の手によって再建されていく。その過程で、僧侶と見習僧が再び寺院に止住するようになり、村落レベルの仏教実践を支える構造が機能回復していくのである。

表2は、中華人民共和国の成立以降における西双版纳の寺院数と出家者数の変遷を示している。1950年初め、西双版纳には574の寺院があり、僧侶930人、見習僧5560人が止住する状況であった。1寺院あたりの出家者数は僧侶1.62人、見習僧9.68人である。大躍進政策の開始（1958年）によって宗教信仰は弾圧されたが、その前年度（1957年）では寺院数594、僧侶数1034人、見習僧数6568人という状況である。1寺院あたりを算出してみると、僧侶

1.74 人、見習僧 11.05 人である。

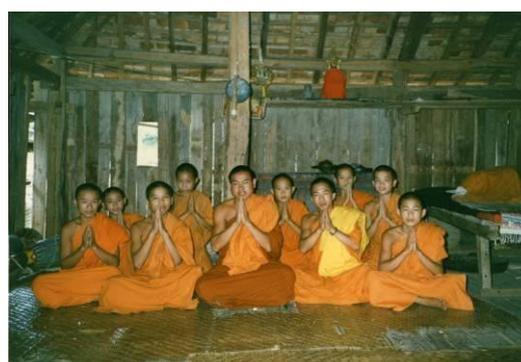
年度	寺院数	僧侶	見習僧	1寺院の僧侶数	1寺院の見習僧数
1950年代初	574	930	5560	1.62	9.68
1957年	594	1034	6568	1.74	11.05
1981年	145	36	655	0.24	4.51
1984年	405	338	6309	0.83	15.57
1985年	415	436	5417	1.05	13.05
1986年	447	546	5507	1.22	12.31
1987年	485	670	5131	1.38	10.57
1988年	494	643	4337	1.30	8.77
1989年	503	664	5125	1.32	10.18
1990年	505	636	4926	1.25	9.75
1991年	526	646	6833	1.22	12.99

（出所）譚楽山（著）・趙效牛（訳）[2005:84]に基づく。

1981年の数値をみてみよう。大躍進政策が開始される以前の数値（1957年）と比較すると、寺院数145、僧侶数36人、見習僧数655人と大きく後退している点が指摘できる。1寺院あたりの数値は僧侶0.24人、見習僧4.51人となる。1950年初めの数値を基準とすれば、寺院25%、僧侶3.8%、見習僧11.6%の状態に落ち込んでいる。つまり75%の村落には寺院がなく、僧侶は皆無に近い状態だったといえる。しかしその後、村落レベルの仏教復興が急ピッチで進み、寺院、僧侶、見習僧のいずれにおいても増加していく。3年後の1984年の時点において寺院数405、僧侶数338人、見習僧数6309人となった。寺院は1950年代初めを基準とすれば、その70%が復興したことになり、1寺院あたりの数値も僧侶0.83人、見習僧15.57人となっている。特に、見習僧の増加は顕著である。



再建された寺院（曼弄楓村寺、1986年）



僧侶と見習僧（景洪県、1986年）

表3は景洪県の仏教復興に関する統計である。1981年には僧侶が1人しかいなかった点に注目したい。翌年から僧侶は増えていき、1985年に寺院数と同数になった。村人側の願望やニーズを満たし、村落としての欠損が解消され、在家者と出家者の間に一つの安定状態が訪れたと考えることができよう。なお、西双版纳全体と景洪県の数値は1寺院あたりの僧侶と見習僧の平均人数においてほぼ同じレベルを示している。

表3 景洪県における寺院・僧人数の変遷 単位：人（僧人数）

年度	寺院数	僧侶	見習僧	1寺院の僧侶数	1寺院の見習僧数
1981年	—	1	40	—	—
1982年	—	20	656	—	—
1983年	—	44	1525	—	—
1984年	138	123	2098	0.89	15.2
1985年	155	155	2158	1.0	13.92
1986年	172	170	1868	0.98	10.86
1987年	173	205	1734	1.18	10.02
1988年	182	201	1514	1.1	8.31
1989年	182	237	1931	1.3	10.6

(出所) 筆者の聞き取り調査(1990年1月2日実施)による。

#### 4. 村落寺院をめぐる出家者の移動とネットワーク

##### 4.1. 村落寺院と出家者の止住と移動

表4は調査対象とした67ヶ寺に止住する出家者数であるが、すでに廃寺となった無住寺(曼景棟村寺)が1つ含まれる。5つのクム(克木)人村落(曼播南嘎、曼回龍、曼香班、曼羅金、曼咪)以外はすべてタイ・ルーの村落である<sup>2)</sup>。年度別でみると、2009年が僧侶71人・見習僧83人、2010年が僧侶70人・見習僧69人である。1寺院あたりの平均人数は1980年代のそれと見習僧数において大きな違いがあることが指摘できる。以下、本文中で検討する図・表のデータはいずれもこの時収集したものである。

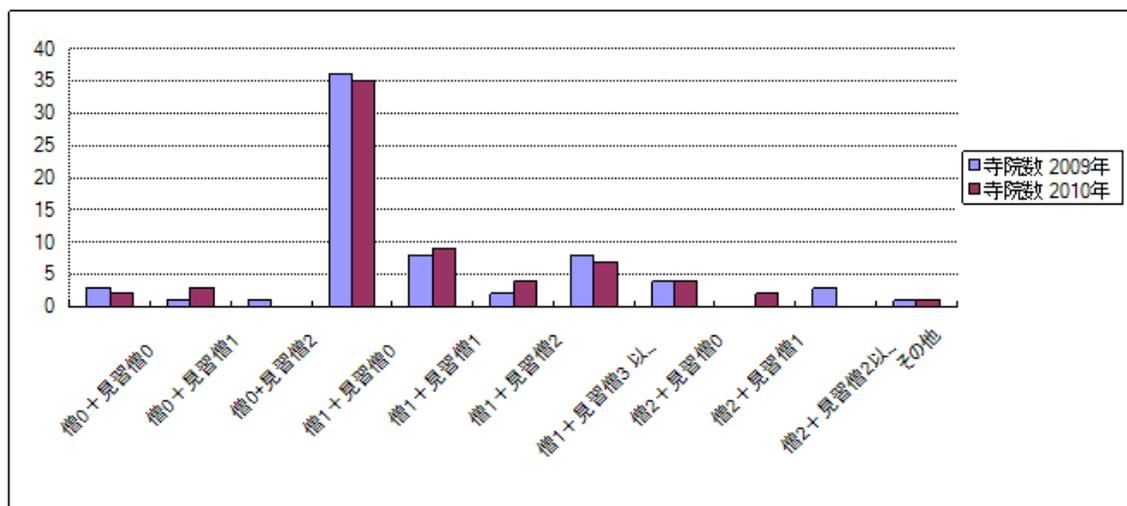
表4 調査対象寺院に止住する僧人数 単位：人（僧人数）

年度	寺院数	僧侶	見習僧	1寺院の僧侶数	1寺院の見習僧数
2009年	67	71	83	1.05	1.23
2010年	67	70	69	1.04	1.02

## 4.2. 寺院の人員構成

図2は各寺院に止住する僧侶と見習僧の人数構成を示している。僧侶1人だけの寺院〔僧1+見習僧0と略記〕が数において突出している。次いで多いのは、僧侶と見習僧がそれぞれ1人ずつの寺院〔僧1+見習僧1〕である。また、後述の図3は各寺院における止住者の人数構成状況であるが、見習僧の人数が多いのは一部の寺院に限られている<sup>3)</sup>。大半の寺院では止住人数が2名以下となっている点が確認できる。なお、#印のついた3つの寺院（曼洒村寺、曼播村寺、曼棟龍村寺）は布薩堂を有し、39ヶ寺（グループ①）、8ヶ寺（グループ②）、20ヶ寺（グループ③）の村落寺院を束ねる拠点となっている。それぞれの布薩堂には、各寺院において住職（Tulong）を務める僧侶が毎月決まった日時に参集し、持戒状況の確認や各種の宗務に関する相談などが行われる。次ページの写真はグループ①に属する寺院である。止住する僧侶と見習僧の人数において違っているタイプ、すなわち住職1人だけの寺院（曼凹村寺）とそうでないタイプの3寺院を具体例として示した。

図2 村落寺院の人員構成



曼洒村寺



布薩堂(曼洒村寺)



曼凹村寺



住職 (曼凹村寺)



曼貫村寺



住職と見習僧 (曼貫村寺)



曼暖龍村寺



住職と見習僧 (曼暖龍村寺)



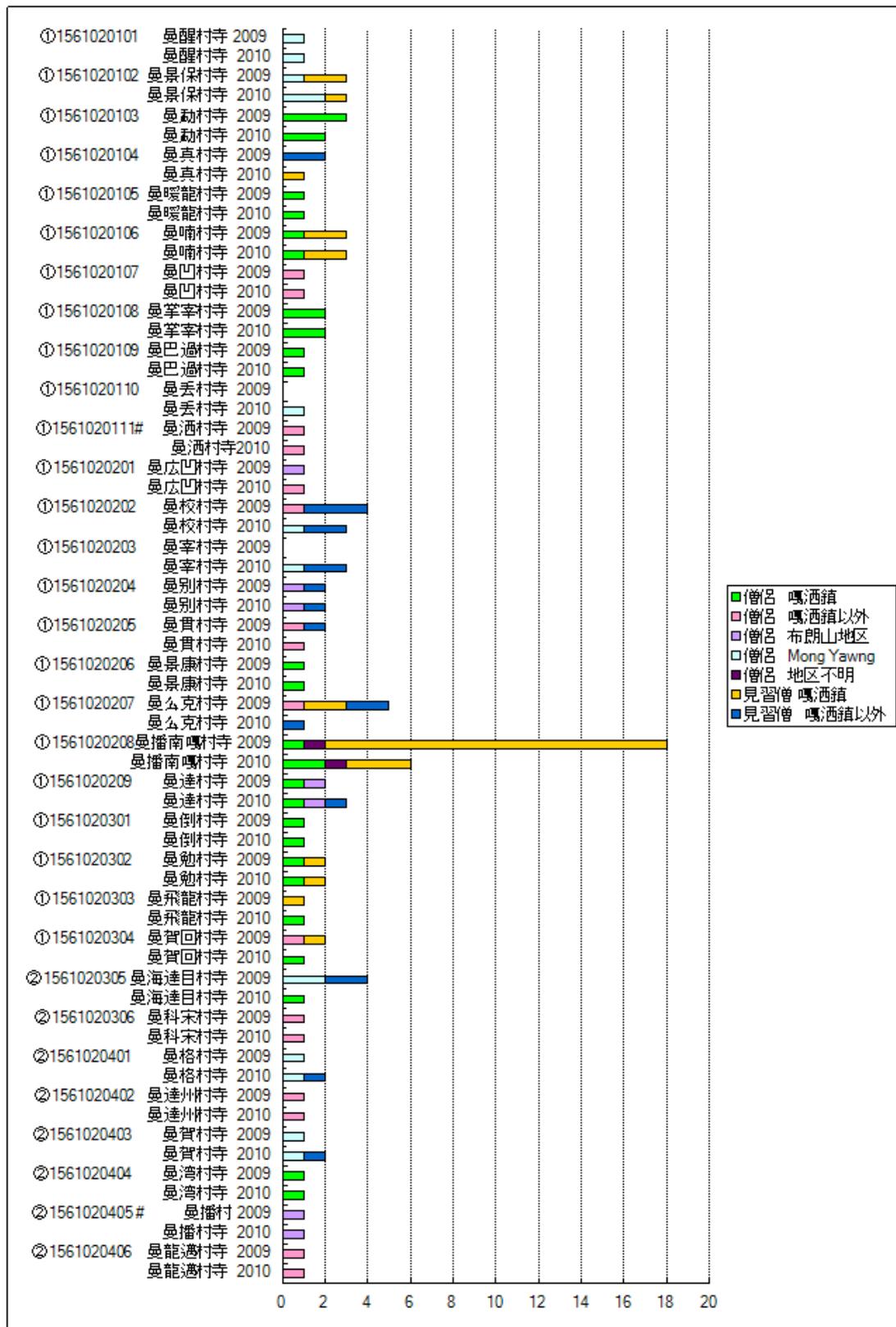
曼播南嘎村寺



住職と見習僧 (曼播南嘎村寺)

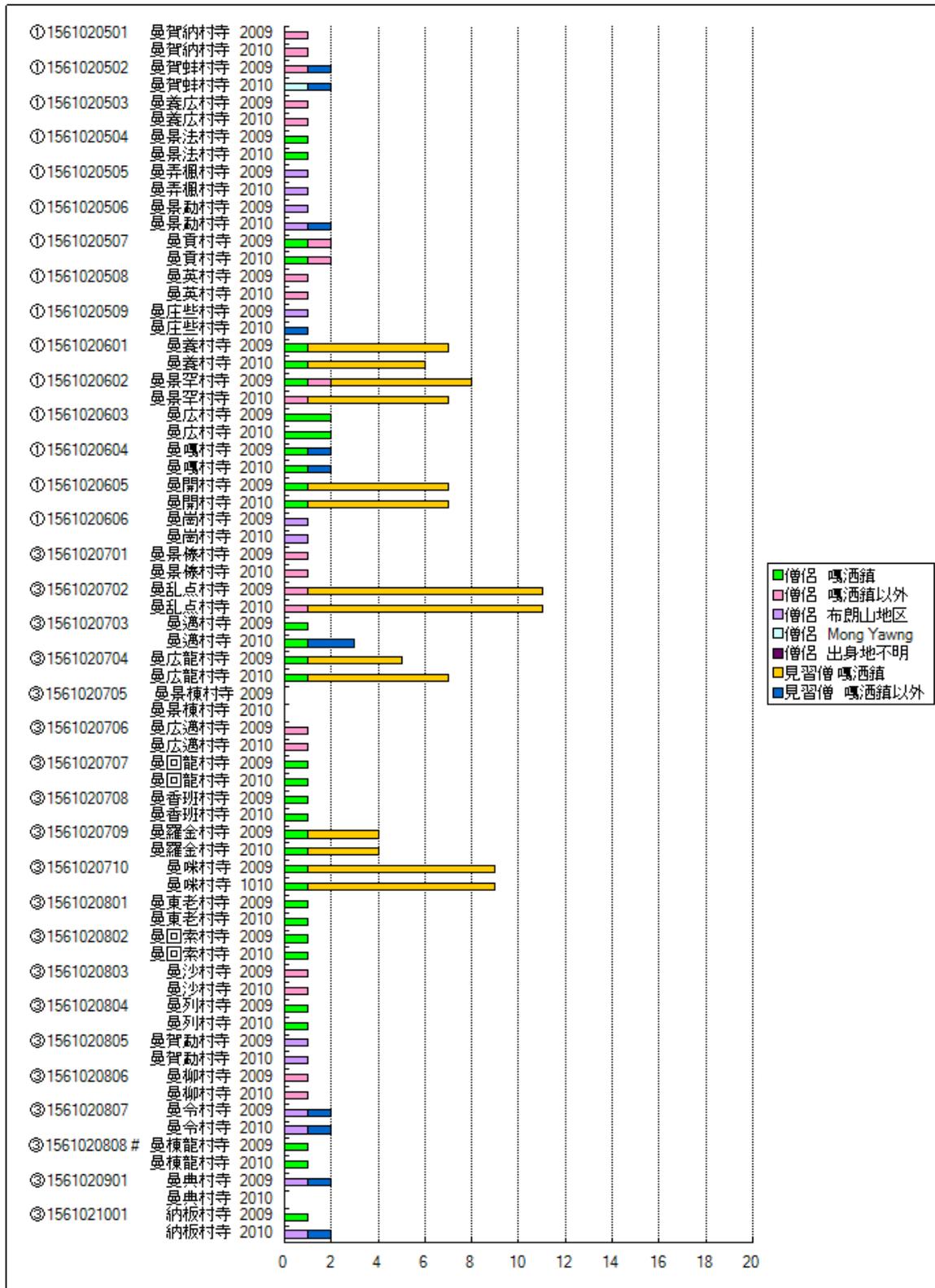
図3 村落寺院の人員構成（1）

単位：人



村落寺院の人員構成（2）

単位：人



#### 4.3. 住職としての寺院止住

僧侶の出生年は1920年代から1990年までと時間幅がある。その内訳は1949年以前7人(8%)、1960年代6人(7%)、1970年代18人(21%)、1980年代44人(52%)、1990年6人(7%)、不明4人(5%)であった。表5は村落寺院において住職を務める僧侶の年齢分布を示している。この表から、村落寺院の担い手は1980年代に生まれた者が中核となっている点を確認できる。村落寺院の住職を、村落レベルの宗教実践にとって不可欠で中核的な職能者とみなすならば、多くの村落において、そうした役職者は20歳代の青年僧によって継承される傾向にあったのではないかと思われる。この点についての調査は今後の課題である。

年齢	2009年		2010年	
	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
20歳未満	1	2	0	0
20～24歳	15	38	15	26
25～29歳	11	18	19	33
30～34歳	10	17	9	16
35～39歳	7	12	7	12
40～49歳	5	8	5	9
50歳以上	3	5	3	4
合計	52	100	58	100

#### 4.4. 僧侶・見習僧の出身地域

表6は寺院止住者の出身地についての集計である。止住者の主な出身地としては、嘎洒鎮、三達山（景洪市区）、ツェンフン盆地以外のムン（勐罕鎮〔ムンナム〕、勐龍鎮〔ムンロン〕、勐遮鎮〔ムンツェー〕、勐海鎮〔ムンハイ〕、勐混鎮〔ムンフン〕、勐阿鎮〔ムンガー〕など）、布朗山布朗族郷、勐宋郷、西定哈尼族布朗族郷、ミャンマー側のシャン州（Mong Yawng、Mong Va）などがある。人数が多いのは、僧侶の場合では嘎洒鎮（33人、39%）、布朗山布朗族郷（16人、19%）、Mong Yawng（7人、8%）、勐龍鎮（6人、7%）、勐遮鎮（5人、6%）などである。嘎洒鎮が最も多く、村落寺院の止住者がツェンフン盆地内の村落出身者によって占められてきたことを推測させる。見習僧ではその傾向がはっきりと表れている。嘎洒鎮（71人、68%）、Mong Yawng（7人、8%）、布朗山布朗族郷（7人、7%）であり、嘎洒鎮の占める割合が僧侶に比べ、さらに大きな比重を占めている点が指摘できる。

調査データの整理と分析を通じて明らかになるのは、出家者の移動が西双版纳を単位とした地域内及びそれに隣接する地域間で行われている点である。ムンハイ、ムンフン、ムンツェー、ムンガーなどはツェンフン盆地のある景洪市に隣接する勐海県に属している。Mong VaとMong Yawngはムンロン（勐龍）から南行し、国境を越えたミャンマー側のシャン州に位置する。いずれもタイ・ルーの主要な居住地である。

西双版纳における出家者の移動については、同一の盆地内を範囲とした近隣村落間での環流が中心であり、それを補う意味で、あるいはこうした宗教的職能者の環流機能の維持が困難になったことによって他地区からの人材流入が生じている。その場合、タイ・ルー村落の出身者であることが優先されており、それが不可能な状況のもとで異なるエスニック集団の出家者（プーラン族）が流入し、その傾向が拡大してきたと推測される。

表6 止住者の出身地域 単位：人

出身地域	行政区分	僧侶		見習僧	
		人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
嘎洒鎮	景洪市	33	39	71	68
三達山	景洪市	4	5	0	0
勐龍鎮	景洪市	6	7	1	1
勐罕鎮	景洪市	0	0	2	2
勐海鎮	勐海県	3	4	0	0
勐混鎮	勐海県	4	5	3	3
勐遮鎮	勐海県	5	6	0	0
勐阿鎮	勐海県	1	1	0	0
打洛鎮	勐海県	1	1	0	0
勐宋郷	勐海県	1	1	0	0
布朗山	勐海県	16	19	7	7
西定	勐海県	1	1	0	0
Mong Yawng	シャン州	7	8	14	13
Mong Va	シャン州	2	3	0	0
地区不明	西双版纳他	0	0	6	6

調査データ及び聞き取り資料に基づけば、各寺院では村落出身者の僧侶、住職が減少し、プーラン族がそれを務める現象が増える傾向にある<sup>4)</sup>。タイ・ルーの伝統的慣行によれば、在家者の仏教儀礼や寺院管理の必要性などの理由から、各村落では僧侶の存在が不可欠である。他方、村落では出家者数が減少が著しい。ある住職の話では、タイ・ルー村落では1984、85年頃からミャンマー側の僧侶を住職として招くようになった。その多くはMong Yawng出身のタイ・ルーであった。しかし1990年代に入ると、外国籍僧侶による長期の寺院止住が禁止され、国籍の点で問題のないプーラン族の僧侶がその代わりに務めるようになったのだという。2000年代に入ると、景洪市政府による宗教管理がさらに厳しくなり、外国籍僧侶に住職をさせない方針が打ち出された。景洪市民宗局は宗教活動場所に対する法律に基づく管理を強化し、「境外僧人」が住職として止住する状況を調査し、2001年6月には同市の統一戦線部と連携し、「境外僧人」の招聘に関する政策を説明し、38名を退去させたとしている〔景洪市人民政府主弁編 2005:261〕。プーラン族僧侶のタイ・ルーの村落寺院への流入は宗

教政策の展開と密接に関係しているものと思われる。

## 5. 今後の課題

西双版纳を対象とした時空間マッピングの課題は、社会主義体制への移行後において国家の宗教政策のもとで進行した宗教実践の断絶と復興の過程を明らかにし、村落寺院とそこに止住する出家者の動態がどのような位相を有するかを上座仏教圏の地域間比較において可視化していくことであると考えている。

実地調査のデータ分析を通じて明らかになった点は、1980年代から90年代にかけて断絶から復興へと転換した村落レベルの宗教実践はその後に変化を遂げ、もはや大半の村落寺院においては見習僧がいない状態となっていることである。村落内部からの人材の循環と補給とによって保持されてきた寺院の運営や民間のニーズに応える仏教的知識や儀礼的慣行の継承が図られるというローカルな人材環流の機能やシステムに亀裂や断絶が生じ始めている。住職を務める僧侶が不足し、他地域から招くことが常態化した村落も増えている。寺院と在家社会との関係は大きく変容しており、多くの村落ではさまざまな方法とネットワークを通じて、寺院の管理を担当し、年中行事や仏教儀礼など、在家者の仏教実践に応じてくれる僧侶の確保に努めているのが現状である。そうした外部から補給される人員には、布朗山地区の寺院で出家、得度したプーラン族の僧侶が一定数含まれている。こうした地域内・地域間の僧侶の移動とネットワーク、村落寺院への止住、それを必要とする村落側の宗教的ニーズなどについて、今後さらに詳しく検討していく必要がある。

村落寺院と止住者の動態を明らかにするためには、その基礎情報として様々な既存データの活用が不可欠である。生態環境、生業形態、地域経済・産業構造、経済収入、人口動態、計画出産、学校教育など、多方面のデータの総合化によって地域社会の動態を描き出し、それがどのような出家者の村落止住と移動を生み出しているのかを検討しなければならない。また、村落内部に蓄積されている社会主義革命以後の宗教実践に属するミクロレベルの出来事や歴史についての社会的記憶、出家者個人のライフヒストリーに関する資料収集も必要である。これらのデータの分析と可視化を通じて、国家の宗教政策のもとに再編されつつあるローカルな宗教空間の様態や問題点の所在が明らかになるであろう。

### 注

- 1) 1950年代から60年代の社会歴史調査 [刀永明・曹成章 1984; 顔思久 1991]、社会変動と世俗化 [譚樂山 (著)・趙效牛 (訳) 2005; 羅陽 2007; 龔銳 2008]、守護靈祭祀と精霊信仰 [朱德普 1996]、仏教儀礼 [楊民康 2003] などについての調査研究がある。西双版纳のタイ・ルーの上座仏教の現状については [長谷川 2011] を参照。
- 2) 1950年代初期にはツェンフン (景洪、jinghong) 盆地に89村落のタイ・ルー村落が存在したという。このなかには国外逃亡、他村への移入等によってすでに存在しなくなった村落も含まれている [景洪県地方志編纂委員会編 2000: 1058-1059]。

3) 2009年の時点で見習僧が多く止住していた寺院には、曼播南嘎村寺(16人)、曼乱点村寺(10人)、曼咪村寺(8人)、曼養村寺(6人)、曼景罕村寺(6人)、曼開村寺(6人)、2010年では曼乱点村寺(10人)、曼咪村寺(8人)、曼景罕村寺(6人)、曼開村寺(6人)、曼広龍村寺(6人)、曼養村寺(5人)がある。

4) プーラン族の僧侶の出身村は章家老寨(章家一隊)、章家二隊、章家三隊、空坎、曼果村、曼因老寨、曼因新寨、老曼娥、曼果村である。いずれも布朗山区に属している。

#### 参考文献

刀永明・曹成章 1984「西双版纳傣族信仰佛教的一些情况」『西双版纳傣族社会综合调查(2)』、雲南民族出版社。

龔銳 2008『聖俗之間－西双版纳賤仏世俗化の人類学研究』、雲南出版集团公司・雲南人民出版社。

長谷川清 2011(共)「西南中国におけるパーリ仏教」『新アジア仏教史 04 スリランカ・東南アジア 静と動の仏教』、324-381(小島敬裕と共同執筆、324-352担当)頁、佼正出版社。

景洪市人民主弁 2005『景洪年鑑 2001-2003』、雲南民族出版社。

景洪県地方志編纂委員会編 2000『景洪県志』、雲南人民出版社。

羅陽 2007『傣族社区与發展』、四川大学出版社。

譚楽山(著)・趙效牛(訳) 2005『南伝上座部佛教与傣族村社经济－对中国西南西双版纳的比較研究』、雲南大学出版社。

熊勝祥・楊学政編 2004『雲南宗教情勢報告 2003~2004』、雲南大学出版社。

顔思久 1991「景洪地区佛教調査」『雲南少数民族社会歴史調査資料汇编』、雲南人民出版社、326-335頁。

楊民康 2003『貝葉礼贊－傣族南伝佛教節慶儀式音楽研究』、宗教文化出版社。

朱德普 1996『傣族神靈崇拜觅踪』、雲南民族出版社。

\* \* \* \* \*

## 東南アジア仏教徒社会の実践マッピングへの道程

### — 徒然図 つれづれづ (5)

京都大学地域研究統合情報センター

林 行夫

7号目を迎えた本ニューズレターであるが、寄稿者の玉稿が揃いながら予定された発行期日を前にいつも足をひっぱっているのが小覧である。この場をお借りして、編集担当者と寄稿者の皆さんに、深くお詫びもうしあげます。

#### 比較による発見と新たな探索

前号でふれたように、収集されたデータの情報学的な定量分析は、とりわけそれが可視化されることで予想しなかった新たな比較の観点を生み出す。

先般9月27日の集会で、ジュリアン氏と須羽氏による徳宏と西双版纳の出家者のトラッキングルートが可視化された。両者を並べると、移動の「動き幅」と移動範囲の違いが一目瞭然である。徳宏はミャンマーと結ぶ「ビルマ軸」の開放系、西双版纳ではタイ国と繋がる「タイ軸」で動き幅が、くしゃっ、とまとまる自足系のようだ。地域別にみれば出家者の移動の動きと範囲は量的な絵としてみえるが、両者を並べると、新たな別の世界が透視される。地域としては同じ西南中国で互いに近接する空間にありながらこれほど違う。その驚きは、両者を隔てる要因、加えて、両者の間にある空間からその差異の意味を捉えなおして探るベクトルとなる。

仏教実践をめぐる現在の国家や地域の境界を超える動きは、当然ながら、個々の地域の歴史や人びとの経験の違いを浮き彫りにする。同時に、出家者の出身地などを変数に加えてみるともっと別のこともみえてくるようだ。仏教実践の目的あるいは実践そのものの質的な違いも浮き彫りになるだろう。

このレベルでの可視化は分析段階のものである。全体を印象的に見せるための可視化ではない。自分が個々の地域の枠内に囚われて事象を理解していたことを想起させ、地域間比較という次の段階へと導くきわめて重要な手続きになる。

そのうえで、自分の分担する地域(タイ東北部コーンチアム郡)の事例を改めて顧みると、気づくことが多々ある。例えば、徳宏や西双版纳とも違って出家者の移動範囲は量的には圧倒的に広いが、遠来からの出家者は、いわゆる「村づき」の寺ではない「森の寺」(「止住域 thi phak song」)に吸収されている。しかも、それは、その地域の住人は寺とよびながら国家に登録されていない「寺」である。これまで何度も言及していることだが、この「寺」が年を

追うごとに増加している。法制度的な類型としてこの種の「寺」をもたない他の国では、基本的に寺の増加という現象は微々たるものだろう。そしてこの傾向がタイ独自のものならば、国家と仏教の関係について従来のタイ・モデルは制度の局面にのみ限って捉えたものであり、現実を映していないことになる。さらに、大陸部東南アジアの仏教徒社会全域でみれば、出家者数は人口増加に比して減少する傾向にあるが、寺院数は減らない。これは何を意味するか。国家や地域ごとの出家そのものの社会的位置付けの違い、同じようにみえる社会変化によって変質するその意義についても新たな世界が描けるのではないか。全体を俯瞰するツールとしてのマッピングと、そのために必要とされる尺度の統一作業やデータの可視化作業は、これまで学術の作法として前提であったことがらを徹底的に相対化する。同時に、フィールドで得たデータをより適正かつ多角的に読み込むために、あるいは、新たな視点からの解釈をもたらすために、国家の制度や地域に関わる統計や史資料を統合する仕掛けが欲しくなる。

比較の地平にたつて改めて気になることの一つに、個々の国家や制度の側が、仏教実践をどのように「教え」てきたのかという問題がある。タイ国サンガ統制法（1902年）は、カンボジアやラオスでの同種の法制度化のモデルとなった点で重要な位置を占めるが、それ以前の状態がどんなものであったか。ただちに再現できないまでも、ある程度の見通しを得るようにする作業は、新たな探索へと導く梃子になるだろう。

## 教育制度と統計

サンガ法が制定される 11 年前にタイに 3 年間滞在した生田得能（織田得能）[1860-1911]（1891[明治 24 年 2 月 8 日]）の「日本ニハ佛教の活論アレド、佛法の活体アルヲ見ズ、其之アルヲ見ルハ、暹羅一帯の地方ナリ」（4 頁）からはじまる同書は、一時出家（本書では「一旦出家」）や還俗しても戒を遵守する俗人の存在など、今日にも継承されている実践についてわれわれが付け加えるべきものがないほどよくできている。当時のタイ（暹羅）は中央集権国家を築くチャクリー改革のただ中であつた。タマユットは「新派」として記されている。同時に、初めて盤谷入りしたとき「廢殿傾塔多きに驚き、朽ちるままに任せる」（73）とある。この記述には、造られては消えるミャンマーの仏塔や東北タイの「森の寺」の造営にみられる実践に通じるものがある。

こうした実践に、サンガ統制法制定にむけて、国家が介入する背景には、国民国家の柱となる近代教育制度の整備と不可分であることはよく知られている。1875 年（明治 8 年）は、大日本帝国政府が工部省の大島圭介をタイに派遣し、国王と謁見、国内事情を調査した年でもあるが、同年に、時のラーマ 5 世が畿内のすべての王立寺院にタイ語と算術を教授する教員配置を命ずる布達を発している。一寺院につき 5 名を限度とする「教育担当僧」を定め、月俸 6 バーツを下賜した（石井 1975:555-556）。これは僧侶（比丘）にタイ語の世俗教育を義務づける嚆矢となった。1921 年、ラーマ 6 世による「初等教育法」（義務教育令）が發布され、義務教育年齢は満 7 歳から 14 歳迄となる。同年はパタニー州の 5,023 行政村に適用したのみで、全国の行政村への適用は 14 年を経た 1935 年のことである。この教育政策の眼目も、国語としてのタイ語読解能力の育成にあつた（石井前掲）。

中西直樹氏（龍谷大学文学部歴史学科仏教史学・教授）のご厚意で閲覧できた雑誌『海外

『佛教事情』所収の「タイ佛教」は、次のような数値を記している。すなわち、1921年より1931年までの10年間で初等学校の生徒数は241,508人から788,846人に増加した。この増加に対応するため、当局は多くの仏教寺院を公立初等学校の校舎に充当させた。1921-22年度では、寺院内の公立初等学校は2,881箇所であったが1931年には4,688と増加する。この数は、同年の公立初等学校の総数5,471の実に85.5%に相当する。また1931年時点の初等学校と中等学校の総数は6,881であるが、その81.4%にあたる4,911が寺院内に設立されている。地域別では、現在の県(changwat)にあたる州(monthon)を行政区画とした当時のタイで14州中8州で公立学校の80%が寺院内にあり、ナコーン・サワン州は87%に達した。「右の10年間は正にタイに於ける教育上の非常時であったが、多数の僧侶は実際教育及び経営の責に任じて無料奉仕をなし、タイ國初等教育の基礎事業に大きな貢献をした」(中島1943:7)。

また、同所には昭和14年(1939年=仏暦2482年)当時の国内の寺院、僧侶(比丘)、見習僧(沙彌)の統計値が再掲されている。原典は「タイ國內閣発行海外留学生用雑誌『thang khaona』」である。国全体では僧侶の数が多く見習僧は少ない。また、チェンマイなど北部地方では見習僧が僧侶より多く、東北・中部地方は僧侶が見習僧より多い[1]。つまり今日のタイと同じ傾向がみられる。あるいは、学校制度と寺院が合体するこの時期に、現代へと至る傾向ができたとも推察される。

ところで、前述の研究集会で笹川秀夫氏は1912年のカンボジアで視学官による寺院・出家者統計文書には出家者(僧侶と見習僧)の他に、寺院に身を寄せるコマー(子供)という項目があることを紹介された。その数が僧侶と同数ほどに多い。

これに喚起されたことが二つある。タイで最古と思われる1899年の寺院・出家者統計にも同様の項目がでてくることである(「寺院 wat 6,830、僧侶 phrasong 59,087、samanen 見習僧 18,697、徒弟 sitwat 43,337」)。カンボジアでは教育視学官による調査であるが、当時のタイの統計も、教育整備に関する調査として実施されている。

徒弟 sitwat は dekwat (「寺の子供」)とも通称されるが、「子供」だけではなく、出家者の身の回りの世話や雑用をする成人も含意する。この数が、タイでも僧侶の数に迫るほど多い[2]。統計にあらわれるこの語は、戦時下で東南アジア仏教を紹介した日本側の記述では「徒弟」と並び「雛僧」という語が当てられている。書き手によって異同があるが、「雛僧」というのは、日本仏教では出家したばかりの新参僧(「初地」 navakabhumi)を含意するため、誤解を招く。

なぜこれほど多いのか。かつては、税金逃れで寺に身を寄せる人々かと想像していた。あるいは、僧侶の得度前に白衣を纏うナーガとして得度者の準備をする期間があり、今日では得度式前日ないし数日間に短縮されているが、昔の東北タイ(1910-20年代)では半年から数年間にわたって寺院に止住していた例を聞いたことがある。そうした得度志願者も含まれていたかもしれない。

その後の笹川氏との私信で示唆を受けたのは、寺に設けた普通学校で学ぶ(寺子をふくむ)俗人子弟全般をさす可能性が高そうだということである。かつて、タイでもカンボジアでも急速に進められた義務教育の整備状況を伝えるためだったからであろう。

ちなみに、手元にあるタイ教育省での『宗務局年次報告』を調べると1990年代末にはこの

項目が消えている。それにかわってイスラームやキリスト教の統計数値が仏教とともに並ぶようになっていた。(続)

### 【注記】

[1] 同所では、1939年度(佛暦2482年度)のタイの寺院、比丘、沙彌の国内の統計値は寺院=18,416、比丘140,744、沙彌75,357である。最大の寺院数をもつのは東北地方のウボン(1,229)、次いでマハーサーラカーム(1,119)とあり、続いて北部のチェンマイ974、東北のローイエット864、北部のチェンラーイ730、コラート650、と続く。バンコクは181寺でスラータニーと同数である。最大の比丘数を擁するのは、中部地方と東北の境界にあたるコラート8,459(次いでウボン7,258、マハーサーラカーム5,972、アユタヤ5,635、バンコク5,364)と続く。最大数の沙彌を擁するのはチェンマイ6,881(次いでウボン5,541、チェンラーイ5,492)と続く。首都バンコクは1,353)。(『海外佛教事情』9(3):41-43[1943])

[2] 「1927年以後タイの佛教教団では年次報告を刊行してある・・・同年<1927年>に於ける寺院数は16,503で、その中の186だけが少数派たる「タマユッティ・ニカーイ」「全国の比丘総数は129,698、沙彌総数83,345、雜僧109,697」「マハー・ニカーイ寺院数16,317、比丘126,317、沙彌81,528、雜僧105,588」「タマユッティ・ニカーイ寺院数186、比丘3,047、沙彌1,817、雜僧4,109」(中島1943:3) / 「1936年度に於ては佛教寺総数は17,592」「全国比丘総数149,146、沙彌総数70,800、雜僧135,727」内訳は「マハー・ニカーイ寺院数17,320、比丘144,474、沙彌68,678、雜僧129,146」「タマユッティ・ニカーイ寺院数272、比丘4,672、沙彌2,122、雜僧6,581」(中島1943:4)

### 【参照文献】

石井米雄 1975. 「タイにおける近代教育の発展—とくにサンガの役割を中心として」 多賀秋五郎編『近代アジア教育史研究(下)』岩崎学術出版社、pp. 535-623.

生田得能 1891. 『暹羅佛教事情』真宗法話会

中島莞爾 1943. 「タイの佛教」『海外佛教事情』第9巻第3号(5・6月號)、國際佛教協會、pp.1-10.

江尻英太郎 1944. 「タイの佛教習慣」『海外佛教事情』第10巻第1號(1・2月號)、國際佛教協會、pp.28-33.

平等通昭 1944. 「泰國佛教の現況」『海外佛教事情』第10巻第1號(1・2月號)、國際佛教協會、pp. 1-21.

\* \* \* \* \*

### 【表紙タイトルバック写真】

西双版纳タイ族自治州景洪市嘎洒鎮 曼丢村寺(Vāt ban tiu)の壁画

(2008年12月29日 長谷川清撮影)

発行：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46

京都大学地域研究統合情報センター・林 行夫研究室

編集：小島敬裕・増原善之・小林 知

宗教と地域の時空間マッピング・ニューズレター第7号(2013年11月30日)